

## 図書館人としての角田柳作先生

山 本 信 男

早稲田大学図書館に、“Ryūsaku Tsu-

noda Sensei, 1877-1964”とこう題名の

一冊の本がある。ハワイの海を思わせる濃いブルーの表紙である。これは、五十年近い年月をコロンビア大学で送り、日本の研究と教育に一生を捧げ、日本への帰国の途中、ハワイで八十七才の生涯を閉じた一人の日本人教師のために、コロンビア大学が行なった大学葬の際の弔辞、その他を収録したものである。

「角田柳作」という名前を聞いたことのある人は、案外少ないであろう。まして、明治二十九年、東京専門学校文学科を卒業した早稲田の大先輩であることを知っている人は、早稲田大学関係者です

ら、意外と少ないのではないだろうか。

こういう私自身も、角田柳作先生のことを知ったのは、ごく最近である。早稲田大学図書館に、当時館長をしておられた大野先生のお世話で就職して二、三年経った頃、国際交換の担当を命じられ、コロンビア大学と図書資料の寄贈交換を始めた頃である。コロンビア大学から早稲田大学へあてた手紙が、何人かの手を経て私の手許に届いた。その手紙には、

「貴校の卒業生で、五十年近くの長い間コロンビア大学のために尽くした角田柳作という人が最近逝去され、その蔵書の一部を寄贈したい」という意味のことが書かれてあった。その後、総長室を経由

して数冊の本が図書館に届いた。主としてアメリカ史に関する基本図書で、タイトルページには、瀟洒な感じの蔵書印が、ひっそりと押されてあった。その後、人事異動で点々と部署が変わっているうちに、角田柳作先生の名前も忘れてしまっていた。昭和四十六年一月、大学からハワイへ派遣され、その帰途ニューヨークへ立ち寄った。その際、コロンビア大学を訪問し、図書館関係者と会食したときのことである。しきりに、「角田先生」および「早稲田」の名前が、会話の中に出てきたのを覚えている。そのときは、どのようにこの二つの名前が結びつくのか理解できなかった。角田柳作先生の名前をすっかり忘れてしまっていたわけである。

昭和四十六年九月、ハワイから帰国して間もなく、大学の外事課の人から電話がかかってきた。用件は、「いま、コロンビア大学から早稲田大学総長宛に手紙が届き、その手紙に、君を二年間貸してほしいということが書かれてあるが、何

か心当りはあるのか」ということであった。コロンビア大学の人たちとの会食の際に、お互いに意見の交換をし、そのとき、ある問題について、「私ならこうする」と自分の意見をはっきり述べたことだけは記憶しているが、その他のことは何も覚えていなかった。早速、外事課へ手紙を見に行った。手紙の用件は外事課の担当者といったとおりであったが、その前文として、「コロンビア大学は、現在全米有数の日本関係のコレクションをもっている。このコレクションは、貴校の卒業生である角田柳作という人が、数十年の年月を費やして築き上げたものである。このコレクションの維持、発展に、ぜひ貴校からの助力をお願いしたいという意味のことが書かれてあった。外事課の人たちは、この前文の重要な意味に気が付かなかつたらしい。すなわち、角田柳作先生を介して、早稲田大学とコロンビア大学が、いかに深い関係にあるかを理解できなかったようである。角田柳作先生のお名前を拝見したのは、これが二

図書館人としての角田柳作先生

度目であった。

種々のいきさつを経て、私がコロンビア大学に向けて旅立つたのは、昭和四十七年四月であった。

同年五月からコロンビア大学の一員としての生活が始まったのであるが、会う人ごとに「君は *Sensei* を知っているか」と聞かれる。最初は誰のことか分からなかったが、「先生」とは角田柳作先生のことであった。コロンビア大学東アジア学部で「先生」といえば、角田柳作先生のことである。私が赴任した当時（先生が亡くなって、すでに十年余り経っていた）でさえ、誰彼となく、「先生」という言葉を口にする。有名な教授から、毎朝オフィスの掃除にきてくれる年老いた勤務の人たちから「先生」という言葉を聞いた。角田柳作先生」といわずに、ただ一言「先生」と呼ぶ。アメリカ国内のみならず、世界的に有名な日本文学研究者であるドナルド・キーン教授が、文芸春秋（昭37・5月号）に書いた「ニエー

ヨークの一人の日本人」が師、角田柳作先生のこと」という文章の冒頭に、「コロンビア大学では、センセイと言ったら角田柳作先生のこと」に定まっている。という一節がある。因に、キーン教授をはじめとする人たちを呼ぶ場合には、「さん」づけである。余談ではあるが、慶応大学では「先生」といえば「福沢諭吉」を指し、その他の人は「さん」づけと聞いている。角田柳作先生は、コロンビア大学東アジア学部の福沢諭吉に相当するわけである。

先生は、明治十年群馬県に生まれた。東京専門学校（現早稲田大学）において、坪内逍遙から英文学とともに、西洋文化を紹介された。しかし、先生がもつとも強い影響を受けたのは、アーサー・ロイドという外人教師で、彼から仏教を体系的な思想として初めて学んだという。後に、仏教伝道者としてハワイへ渡る契機がここにあったわけである。明治二十九年東京専門学校文学科を卒業した後、一時、高野山の大学林（眞言宗）で英語を教えてい

た。その後、福島および仙台の中学校で英語の教鞭をとっていたが、明治四十二年、仏教伝道のためにハワイへ渡った。

いまでこそ、ハワイは新婚旅行や観光旅行で日本にはなじみ深い土地ではあるが、明治四十二年頃のハワイといえは、まだ原住民がほとんどで、日本人といえは、日本から追われ、はみ出した人たちがそのほとんどであつたろう。私がハワイ滞在中に会つたある一世の人は、ちょうど角田柳作先生と同時代にハワイへ渡つたらしいが（話を聞いた当時は、もちろん、先生のことは知らなかった）、当時の苦難にみちた生活の模様を、厳しい目付きで語ってくれたのを思い出す。ついで、大正七年、アメリカ本土に渡り、コロンビア大学で、当時アメリカ精神の代表といわれたジョン・デューイに哲学を学んだ。先生は、これ以外の講義にも精力的に出席し、キーン教授によれば、先生ほど多くの講義を聞いた人は、アメリカ人の中にさえ、あまり多くはいないであろうという（因に、先生がコロンビ

ア大学で初めて講義を聞いたのは、四十才のときである）。おそらく、西洋文化、とくにアメリカ文化という鏡をとおして、日本および日本文化を模索しつつけたのであろう。

昭和三年、コロンビア大学構内に日本文化研究所を設立し、自ら初代所長となつた。当時アメリカにおける東洋研究といえは中国が対象であり、日本は単なる中国の亜流ぐらいにしか考えられていなかったのである。日本は独自の文化をもつ国として認められていなかったのである。角田柳作先生は、このような状態を嘆いて、正しい日本の文化をアメリカ人に伝えるとともに、自らも日本を勉強しようとしてこの研究所を設立した。日本文化研究所は、昭和六年にコロンビア大学に併合され、東アジア学部日本学科の基礎となった。現在、コロンビア大学東アジア図書館の中枢となつている日本関係のコレクションは十数万冊に上つており、全米有数のコレクションといわれている。このコレクションの大部分は、角

田柳作先生の努力の結晶であり、図書資料収集のために、日本とアメリカを何度も往復したという。先生の熱意に打たれて、当時の三菱財閥および皇族の方々が、積極的に援助をしたという。わが国に軍国主義が芽ばえ、暗い時代に突入せんとしていた時代である。単なる功名心や好奇心だけでできる仕事ではない。そこには、言うに言われぬ苦勞があつたであらう。コロンビア大学東アジア図書館の書庫にぎつしり並んだ古ぼけた本をみてみると、角田柳作先生の執念みいたいものが伝わってくる。同時に、このような偉大な先輩と学舎を同じくした自分を誇らしく思えてくる。

角田柳作先生の残した業績は、単にコロンビア大学東アジア図書館のコレクションだけではない。図書資料の収集整理に努力されるかたわら、先生は、日本思想、日本歴史、日本古典文学等を教えられていた。コロンビア大学の停年は六十五才であるが、角田先生は、実に八十五才まで教壇に立つておられたといわれる。



コロンビア大学でも前例のないことであるという。

角田柳作先生の人柄を知り、その影響力の大きさを知るには、先生の下から育っていった人達を見れば充分であろう。

西洋における日本文化史の最高権威者といわれるジョージ・サンソム、安藤昌益の研究で有名であり、サンフランシスコ講和条約でカナダの首席随員を勤めたハーバート・ノーマン、日本文学の研究家として世界的に有名なドナルド・キーン、前コロンビア大学副総長で日本思想史の研究で名高いドバリー、日本文化の実証的研究「すえ村」を書いたエンブリー、「日本の仏教美術と建築」のソーパー等、先生の弟子には、それぞれの分野の先覚者というべき人たちが多い。そのほか、私が聞いたところによると、東アジア学部日本学科の教授のほとんどすべての人が先生の講義を聞かされたわら、先生の下で図書資料の収集整理の仕事にたずさわったということである。先生の指導の下に、本を運んだりラベルを貼ったりしな

がら、日本関係の文献を知り、それらになじんでいったという。先生は、文字どおりコロンビア大学東アジア学部日本学科の生みの親であり、「先生」と呼ばれるにふさわしい人であった。

昭和五十年十月、日米大学図書館会議出席のために来日した、コロンビア大学副総長で図書館長でもあるハース先生御夫妻ともに、十一月の初め東京のホテルで夕食を共にする機会をえた。冷たい秋雨の降る静かな東京の夜景を見下しながら、早稲田のこと、角田柳作先生のことを、ハース先生と語り合った。先生は、角田柳作先生が築かれた日本関係コレクションの維持発展に、今後ともますます努力したいと力強く語って下さった。

角田柳作先生が最初にアメリカの土地を踏んだハワイで学び、先生が築かれたコロンビア大学の東アジア図書館で働き、先生がニューヨーク生活のスタートを切られた当時住まわれていたというアパート（マスタールアパートメント）に居を構えるという、あまりにも角田柳作先生の足

跡を追いかけて過ぎている感のある私である。しかしこれは決して意識的なものではなく、すべて偶然である。意識的に追いかけるには、角田柳作先生は、あまりにも偉大で遠過ぎる存在である。しかし「自らを教育しよう」と努力しつづけるとき、はからずも人々に大きな影響を与える。」という角田柳作先生の尊い教訓だけは、常に胸にいだいていたいと思う。

（角田柳作先生に関する文献としては次のようなものがある。

ドナルド・キーン「ニューヨークの一人の日本人」文芸春秋 昭和三十七年五月号、永井道雄「異色の人間像」講談社 昭和四十年、斎藤勇「文学と語学との間」EJEC出版社 一九七二、Ryūzaku Tsunoda Sensei, 1877-1964)。

注・本稿は、早稲田大学法学部のクラブの一つである企業法研究会の会誌に、このクラブの創立者である大野實雄先生の古稀をお祝いして書かれたものを基にしている。